

F. F. ショパンのテンポ・ルバート

——ノクターンの書法からみたその特徴——

Characteristics of F. F. Chopin's *Tempo Rubato* Examined in Notation of Nocturnes

飯島聡史

IJIMA Satoshi

本研究はピアニスト兼作曲家であるフリデリク・フランチシェク・ショパン Fryderyk Franciszek Chopin (1810-1849) が楽譜に記したテンポ・ルバートの特徴について明らかにすることを目的としている。ショパンの音楽は多くのピアニストの重要なレパートリーであり、幅広い聴衆に愛されてもいるが、演奏頻度と比べて、表現様式についての研究は決して盛んとはいえない。特に、テンポ・ルバートについては、多くの研究者、演奏家によってショパンの音楽の中で重要な位置を占めると指摘されてきたものの「演奏家によるテンポの揺らし」といった漠然とした認識に留まり、研究の余地が残されている。そもそもテンポ・ルバートとは 18 世紀初めのイタリア声楽を最初期とし、脈々と体系化されてきた演奏習慣であり、作曲書法の一つでもある。テンポ・ルバートには、演奏における伴奏と旋律のズレやテンポの変化といった複数の概念が存在する。実践という観点からみた場合、テンポ・ルバートは演奏習慣であるため、必ずしも楽譜に記されるとは限られないが、作曲家によって明示的に記譜される場合も少なくない。それゆえ、記譜されたテンポ・ルバートの特徴を研究することは、過去のテンポ・ルバートの実践の一端を解明し、ショパンをはじめとする作曲家達の作品の演奏を再構築することに繋がる。

本研究では、テンポ・ルバートの歴史的変遷を辿り、テンポ・ルバートをいくつかの型に分類した。この分類に基づいて、ショパンの作品を分析し、ショパンが楽譜に残した書法としてのテンポ・ルバートの特徴を明らかにした。その結果を踏まえて、演奏実践における応用可能性も探求し、それが表現として妥当なものであるか、そしていかなる効果が期待できるのかについても検討した。また、その主な研究対象としてノクターンを採り上げた。それは、ノクターンが伴奏付きの装飾的な旋律を特徴とするイタリアの声楽様式に基づいており、声楽で実践されていたテンポ・ルバートを強く反映するジャンルだからである。

本研究は大きく4章に分けられる。まず、「序」では研究目的、そして音楽研究及び演奏実践における本研究の必要性について述べた。「第1章 テンポ・ルバートの基本概念」では先行研究に基づくテンポ・ルバートの歴史の変遷とその中でのショパンの位置づけ、また使用方法の概略を提示した。テンポ・ルバートはおおよそ1800年を境に基本概念が変化したとされ、リチャード・ハドソン Richard Hudson は前期ルバート、後期ルバートという枠組みに大別してその歴史を俯瞰している (Hudson 2004)。そのような内容に基づき、ジャン＝ジャック・エーゲルディングル Jean-Jacques Eigeldinger の著書 (エーゲルディングル 2020) をはじめとするショパンに関する先行研究では、ショパンのテンポ・ルバートの独自性を強調している。しかし、それらはショパンに関して一元化した視点で語られており、同時代の作曲家達にまで十分に視野が広げられず、多くの作曲家達の作品に共通する手法であっても、ショパン独自の方法として述べられている。従って、第1章では先行研究の主張を今一度批判的に精査し、テンポ・ルバートに関する基本概念を整理した。

「第2章 ショパンのノクターンにおける作品分析」では、第1章で示したテンポ・ルバートの基本概念に基づいて作品分析を行った。その前提として、ジャンルとしてのノクターンの成り立ちや、ショパンのノクターンの基本的性格についても説明した。それを踏まえて、学習期、初期、中期、後期、晩年期と、ショパンのそれぞれの時期におけるテンポ・ルバートの書法的特徴を明らかにするとともに、その変遷を辿った。そして、それらがどのような箇所で、どのような目的をもって用いられたのかを考察した。個々のテンポ・ルバートの特徴をみた上で「第3章 演奏実践におけるテンポ・ルバートの応用可能性」では、第2章で明らかにしたテンポ・ルバートの書法的特徴に基づいて、演奏家の解釈上行われ得るテンポ・ルバートの応用可能性を提示した。また、演奏実践と関連が深い装飾に基づく方法についても検討した。その結果に基づき、個々のテンポ・ルバートの検討から得られた書法的特徴を演奏実践上の解釈に反映させることは、演奏を構築する上で有効な手がかりになると考える。そして、「第4章 ショパンと同時代の作曲家におけるテンポ・ルバート」では、それまでの内容を踏まえてショパンと同時代の作曲家との比較検討も行い、ショパンのノクターンにおける書法としてテンポ・ルバートの特徴が、他の作曲家の作品にも共通する部分があることを明らかにした。最後に「結論と今後の課題」を据え、「補遺」ではショパンのノクターンの各形式概要や演奏録音分析についても所見を示した。結論としては、以下の三つの点が挙げられる。

一つ目は、ショパンのテンポ・ルバートの書法的特徴についてである。本研究ではテン

ポ・ルバートの基本概念に基づきながら使用方法を分類し、ショパンのノクターンを分析することで、ショパンのテンポ・ルバートの詳細について明らかにした。また、多くの先行研究では、作品（楽譜）ではなく、ショパンに関する弟子等の証言のみに依拠して、ショパンがテンポ・ルバートを独自の方法で用いたと結論づける傾向があった。従って、本研究ではショパンと同時代の作曲家達の作品を分析することで、これまでショパン独自の方法として述べられてきたテンポ・ルバートが多くの作曲家達の間で往々にして用いられていたということも明らかにした。

二つ目は、演奏実践におけるテンポ・ルバートの応用可能性についてである。演奏実践への応用については、ハドソンの著書（Hudson 2004）においても言及されていたが、全ての旋律音を遅延させる等というような画一的な方法を提起するに留まっており、研究の余地が残されている部分でもあった。従って、本研究では第2章で明らかにしたテンポ・ルバートの書法的特徴をもとに、第3章でそれに類する書法や音楽的性格をもつ部分に対して演奏実践における応用可能性を検討した。

三つ目は、テンポ・ルバートの歴史におけるショパンの位置づけについてである。前述の通り、ショパンのテンポ・ルバートの方法それ自体は、これまで指摘されてきたような特別なものでは決してなく、他の作曲家達によっても用いられたものであったということが明らかになった。しかし、ショパンが鍵盤作品に初めて *rubato* という指示を用いた作曲家（Hudson 2001）であることは軽視すべきではない。「当時の人々は、ショパンがルバートの仕方ある程度まで音符で正確に記そうとする試みを、こぞって批判」（エーゲルディンゲル 2020, 176）したとされるが、それにも関わらず、ショパンは詳細な記譜にこだわって演奏家に対して細やかな解釈を求めた。この点において、ショパンが特異な存在であったという指摘は可能である。その姿勢は、ショパンの没後、19世紀後半から20世紀に作曲家と演奏家が分化していく過程で、作曲家は概して明文化されない演奏習慣に依拠せず、記譜を精緻化させていったという歴史の変遷を先取りしているかのようである。つまり、ショパンがテンポ・ルバートを書き記そうと努めたことは、彼が「解釈される作曲家」としての自覚をもっていた証左であり、ショパンを「ピアニスト兼作曲家」というよりも「作曲家兼ピアニスト」として、また、その先駆的な存在として捉えることもできるだろう。しかし、ショパンのテンポ・ルバートの変遷を辿ると、最終的に後期、そして晩年期の作品にかけて、書法の上ではその使用頻度は次第に減少していき、簡素化への道を進んだ。その一つの背景として、ショパンの音楽観において、バロック期や古典の音楽をは

はじめとする伝統に重きをおくようになり、単純さを求める美学へと移行していったことが挙げられるだろう。それは、後期である 1840 年のショパン自身による以下の発言とも一致する。

単純さこそがもっとも大切です。あらゆる困難を克服し、数限りない音符を弾き尽くした後にこそ単純さがまばゆいばかりの輝きを帯びるのであり、そうなれば至高の芸術を究めたことになるのです。この極意に一刻も早く到達しようと思う人ほど永遠に達することができないでしょう。

ショパン (エーゲルディンゲル 2020, 83)

最後に、本研究が単なる作品分析に終始せず、演奏実践への応用可能性にまで言及した目的をつけ加えたい。それは、前述の通りテンポ・ルバートが演奏と不可分な問題であることが第一の理由に挙げられる。近年では、パフォーマンス研究の文脈で、19 世紀音楽研究においても演奏研究が注目されるようになり、演奏家兼音楽学者達によって研究が積み重ねられてきた。しかし、日本ではとりわけピアノ音楽に関してはまだ十分な演奏研究が行われておらず、具体的な演奏方法にまで踏み込んだ研究となると、非常に少ない。しかし、演奏家がどの方法を選択し、表現するかは、それぞれの解釈に委ねられるものの、楽譜に記された特徴を明らかにし、一定の根拠に基づいた実践論を提示することは、学術的知見に支えられた豊かな演奏表現を行う上で、また、教育の上でも必要である。本研究は、演奏家が積極的かつ自由な発想で学術研究に立ち入り、奏法や表現様式についての議論を喚起することを意図して、実践への応用可能性を提示した。